

第2学年西組 図画工作科

「イメージを土粘土で表そう

～『おもしろい〇〇』をつくろう～」



1 特別支援教育の視点、支援員の動きについて

(1) 図工の授業において

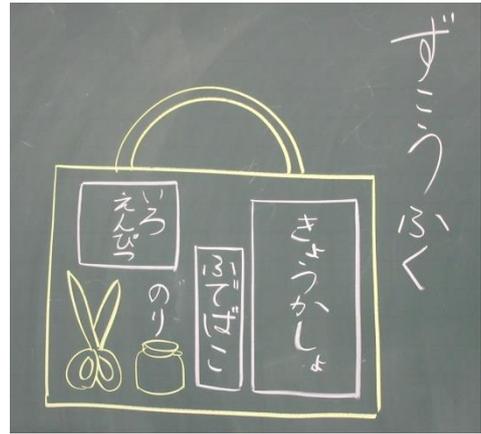
視覚的支援

★ 図工の授業全般において

① 図工室へ移動する前の準備

図工の時間に、図工室へ移動する際に、たくさんの持ち物を持って行くようになる。すぐには取りに戻れないことから、前の黒板に服装と持ち物を書き、自分で見て確認できるようにする。この時、移動用の袋の中に入れるものを、簡単に絵で表し、分かりやすくする。

1年生の1学期は、絵で描くのではなく、図工の教科書等、実物をクリップ磁石で挟んで示していた。



② 道具をしまうために

図工の時間には、のりやはさみ等のこまごました道具は、たくさん使う。子どもたちは、製作に夢中になってくると、「でんぷんのりのふたがなくなった」等、道具をよく机の下に落としてしまうことがある。そこで、小さなプラスチックケースを準備し、しまうものの写真を中にはり、「使ったらこの入れ物に片付ける」という意識をもたせる。図工室におけるお道具箱のような使い方をする。



③ 活動の時間を知らせるために



図工の時間には、製作の時間、交流の時間等、活動する時間がある。あとどのくらいの時間活動できるのか、終わりが分かるようにするため、キッチンタイマーをテレビに写している。1学期はタイムタイマーを使っていたが、時計の概念が十分に身につけていない

1年生にとっては、数字が次々と減っていく方が、「残りの時間が少ないな」「あと〇〇だけはしておこう」等、本学級の子どもたちは意識しやすいようだった。このキッチンタイマーは、5分、1分等区切りのよい時に短いアラーム音が鳴るため、その音でも子どもたち



【タイムタイマー】

は残りの活動時間を意識できるようになる。終了の時間が来たら長くアラームが鳴り聴覚的にも終わりの合図があるので、気持ちをなかなか切り替えにくい子どもも、切り替えやすくなる。

キッチンタイマーのアラームに加えて、ハンドベルも用意しておく。タイマーのアラームが聞き取りにくい場合はベルを鳴らし、終了の合図をよりは

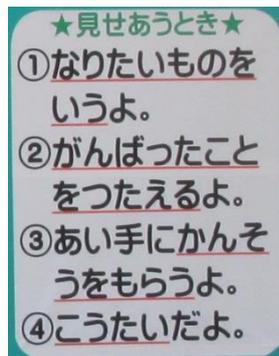
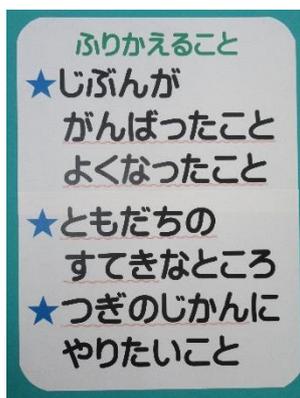
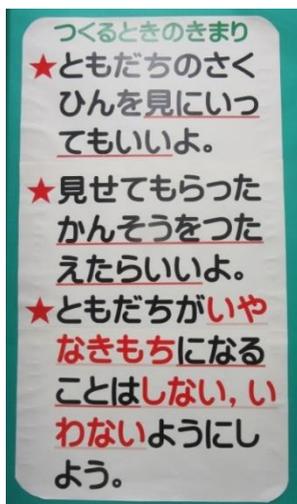


っきりさせる。

★ 本題材において

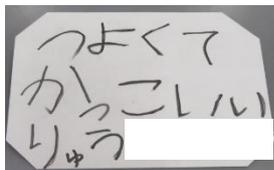
① 活動にあたっての留意点、手順の掲示

子どもたちは、学習に関することの学級での決まりをつくっても、次の時間には記憶が薄れていることがままある。そこで、活動の留意点や手順など、すぐ確認できるように掲示しておく。または、必要なときだけ提示し、終わったら外せるようにして、黒板が留意点や手順表で埋まらないようにする。



スチレンボードに貼って、必要なときに黒板にさっと貼れるようにする。

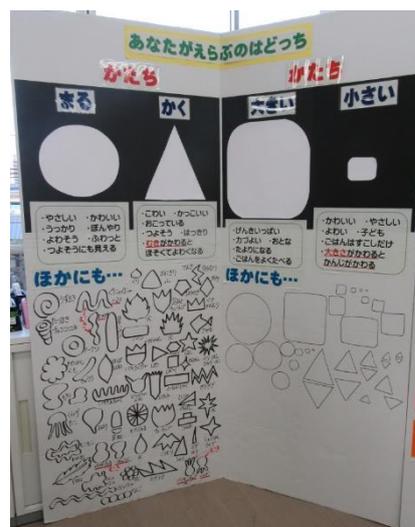
② 交流の際には



子どもたちが自由に想像してつくっている作品は、本人は何をつくっているかよく分かっているが、他の友達に見せた時、短い時間で見ただけでは、相手に何をつくっているのなかなか伝わらないことがある。また、1年生の子どもは、自分の想像したことをうまく説明できないという実態もある。そこで、自分のイメージを書いた紙を名札のように服にはり、相手のイメージが分かりやすいようにする。

③ 形や色を選択できるように

「自由に想像しよう」といっても、「何を想像したらよいのか分からない」や、「新しい工夫を考えよう」といっても、「どうしたらいいのかわからない」という困り感をもつ子どももいる。そこで、想像が苦手な子どもには、参考になる作例、写真等をたくさん用意し、その中から表したいイメージに近いものを選んだり、組み合わせたりしながら、イメージを膨らませられるようにする。また、工夫を考えられない子どものために、今まで学んできたこと（あなたが選ぶのはどっち）を掲示しておき、その中から工夫を選んだり、組み合わせたりすることで、自分の工夫ができるようにする。



選択することを繰り返しながら、徐々に発想できるようになる。そのために、見て分かりやすい掲示にすることが大事。

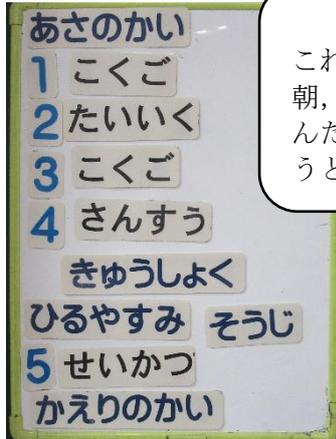
図画工作科の特性から

★ 図工という教科は、それぞれ、自分の思いに合わせて表現していくもの。子どもの表現で「これが正解」というものはない。教師は、常に肯定的に、受容的に、具体的にそれぞれの子どもの表現を認める声をかける。また、子どもたちどうしにも広がるように、まずは教師が手本を示し、子どもたちの中で受容的な交流のできる子どもを称賛し、それをモデルとできるようにしていく。教師や友達から認められることで、自己肯定感も育ってくると考える。互いに学び合える受容的な雰囲気をつくることのできる教科である。

★ どの子どもにも「表したい」「やりたい」という思いをもたせることで、表現に困った時、何とかしようと教師や支援員を頼ったり、友達に聞いたりできると考える。子どもの実態、興味・関心のあるもの、日常の活動とつないで、題材を選択したり、題材の構成を工夫したりする等、子どもの意欲をより喚起できるようにする。そのためには、教師自身が題材を楽しむことが大事である。

(2) 日常の取り組み

① 視覚的支援



1日の流れの掲示
これを見て、体育係が朝、登校して片付けが済んだら体操服に着替えようと声をかけている。

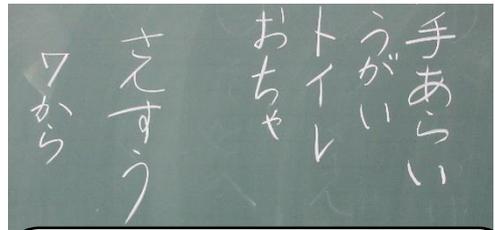
こころがけていること

- 「指示や説明のことは短く、簡潔に」
- 「手順に沿って」
- できていることをほめる。



給食の後の黒板

①は歯磨きのブラシ、コップの片付けのこと。
②は掃除のために、机を教室の後ろへ運ぶこと。
③は外で元気よく遊ぶことを伝えている。



15分休みの後の黒板

外から帰ってきてすることを短く書いておく。
時計がよめないので、長い針が7から算数が始まると知らせる。

★ 子どもへの関わり方

- ・ 子どもにもプライドがある。それを大切にしたい支援方法を考える。
- ・ 1年生の子どもは、集中力が長く続かない。1活動を15分程度で行うとよい。
- ・ 「聞かなくても分かる」ので、集中して聞けない子どももいる。1か月に1回程度は、必ず聞いていたか確認（話す前に「最後まで聞いてね。」後から「聞いたよね。」）し、聞いている事をほめる。また、「今から言うことは、最後まで聞かないと分からない。」と言ってから話し、後でチェックすることで、集中して聞くことができるようにしていく。

- ・ 一つ集中したらいいかあまり分からない子どももいるので、一つ集中すべきか（「今から大事なことを言うよ。よく聞いてね。」）を教える。また、後で確認できるように内容を掲示する等して、自己修正できるようにしておく。
- ・ 1年生は自分のことをメタ認知できにくい。友達との関わりに課題がある子どもには、それができるようになるまでの間、継続して指導をしていく。例えば、「順番を守ってくれてよかった」「友達に優しくできたね」等、少しでもできたことをほめる。周りの子どもたちも育て（ソーシャルスキルトレーニング等も活用できる）、受容的な学級の雰囲気の中、徐々に分かるようになる。ただし暴力や、人権侵害的な発言などは許さない。しかし、暴力の回数が減ったこと等、伸びをほめることで、更に回数を減らせるようにする。
- ・ 行動と思考が繋がらない子どもには、やり方を教える。例えば、テストで見直しをしなければいけないとは思っているが、実際は見直せない子どもに、見直しのやり方を教える。
- ・ 具体的なイメージがわきにくい子どもには、目安を示す。例えば、「大きくつくろう」の「大きく」とはどのぐらいの大きさなのか、目安を示すことで分かるようになる。
- ・ 作業をする場所、自分の作品を友達と話し合う場所、材料等を置いている場所を分かりやすく示し、場の構造化を図る。また、学習の流れも視覚的に示し、今、どこで、何を誰とするのかを分かりやすくする。

(3) 支援員さんとの連携について

- ・ 担任は時に厳しく指導することもある。支援員さんも場合によっては、そうすることもあるだろうけれど、基本的には、褒めてくれる・認めてくれるのが支援員さんであると考えている。
- ・ 基本は褒めてくれるのが支援員さんであるが、「どのような子どもを育てたいのか」という担任の思いを伝えることで、支援員さんが関わり過ぎて自分では何もできないという子どもにならないように気を付ける。子どもたちが支援員さんに甘えすぎないように、手伝うところとそうでないところを考えながら関わってもらう。例えば、鞆の中身の片付け、体操服への着替え、エプロンをたたんでしまう等、時間に余裕があるものは、手伝わずに促す。しかし、子どもだけではなかなかできないところ、例えば、掃除のバケツの水をひっくり返す、体操服を取り違えて分からなくなる等が考えられる。その他にも、本当に困っている様子が見られたら、手伝うというように、「基本は手を出しすぎないで見守る」をお願いしておく。
- ・ その子が何に困っているのか、手助けのタイミングはいつかを担任は見取り、どのようなときに手助けしてもらうかを支援員さんに伝えることで、支援員さんも関わり方に迷ったり困ったりということが減り、有効な支援をしていける。
- ・ 子どもの発言をもとに、情報の共有を行う。身近にいてくれる支援員さんには、不安に思っている事や、友達との関わりで失敗したこと、つらかった出来事等を言いや

すい子どももいる。担任が知らないという情報がないように、つらい思いをしたことや、困ったことを訴えてきた場合は、担任と情報を共有する。担任も、配慮の必要な子どもについての情報は支援員さんに伝え、子どもたちが安心して学校生活を送れるようにする。打ち合わせの時間はなかなか取れないことが多いが、困ったことにはすぐ対応できるように、重要なことはすぐに伝え合うようにする。日常的なことは、休み時間や放課後等のちょっとした時間に共有していく。

- ・ 支援員さんは、授業中は担任から遠い座席の子どもの様子を中心に支援するようお願いする。(後ろ側や外側等) あまり子どもの前を頻繁に横切らないことで、子どもの集中を途切れさせないようにする。担任は、特に気になる支援してほしい子どもの座席配置を考えるとよい。
- ・ 支援員さんには、あまり一人の子どもにばかりつかず、全体的に関わってもらう方が、周りの子どもたちが「あの子いつも先生に助けてもらって…」等の意識をもたないのでよい。

ただ、本時の図工では、製作の進度がゆっくりの子どもや技能的な課題が大きい子どもについては、中心的に関わってもらうように考えている。
- ・ 注意力が散漫で話を聞き漏らす子どもや、一度聞いただけでは理解しにくい子ども、聞いたけれどもすぐに忘れてしまう子どものために、担任が話したことを短くまとめ、支援員がホワイトボードやスケッチブック等へ書き、担任の話が終わった後で黒板等に示すことで、後で子どもが確認できるようにする。
- ・ 担任と支援員さんが、よい人間関係を築いていること、何でも話せるような雰囲気、子どもにもよい支援をもたらすと考える。いろいろな個性をもつ1年生35名を、担任一人で見ることは大変で、支援員さんが子どもたちと共に担任も支えてくれているという感謝の気持ちをもつこと、子どもたちを伸ばそうという思いを共にもつことが大切である。

2 その他(教材について)

接着剤「ボンドタッチ」

- ・ 一度に出てくる接着剤の量を調節しやすく、扱いやすい容器であることから、低学年児童に向いていると考え、本題材で使用することにした。
- ・ サクラクレパスより発売されている「ボンドタッチ」は商品名であるが、本実践ではその商品名を子どもたちと使っている。「化学接着剤」ということばは教えるが、子どもたちにとって覚えにくいので、授業中に使うことばは「ボンドタッチ」とした。

メンディングテープ

低学年の工作の材料は、主に紙であることから、でんぷんのりを使って接着することが多い。しかし、大きな飾りをつくって面につける等、のりでは接着できなかつたり、ボンドではすぐに乾かなかつたりと、活動しにくい場合がある。そこで、目立ちにくいメンディングテープを使うようにした。子どもによっては貼り過ぎることもあるが、飾りが取れてしまうことの方が意欲減退につながると考え、補助的に使うようにした。

〈参考文献〉

成長する授業 子どもと教師をつなぐ図画工作 岡田京子 2016年 東洋館出版社

絵心がない先生のための図工指導の教科書 細見 均 2017年 明治図書出版

新しい自分と出会う造形活動 筑波大学附属小学校図画工作科教育研究部 2011年 不味堂出版